



## 道場の舟

### 植芝盛平の六つのプライマーにおけるコールマンのマクロ-メゾ-マイクロ機制

ラテックス G.N.R. スペース・コヨーテ &  
OpenAI ChatGPT-5.5 Pro (i.e., *H. sapiens*) \*

2026年6月4日

#### 要旨

本稿は、植芝盛平の最初の六つのプライマー道歌を、修正版のコールマン・ポートとして読む。通常の図式では、マクロな条件がマイクロな状況を形づくり、マイクロな行為者が行為を形成し、その行為の集積がふたたびマクロな結果として返ってくる。しかしここでは、その舟に見えるメゾの甲板をつける必要がある。道場、系譜、儀礼化された発話、翻訳、反復される訓戒、そして対人稽古こそが、宇宙的な「武」を実践可能にする中間形式だからだ。第一原理は「武」を宇宙論的・歴史的秩序の水準に置き、第二原理はその秩序を「人との合気」へ移し、第三原理は稽古者を「寸隙なき心魂一如」の統一へ圧縮する。第四原理はテロスを「和合美化」と名づけ、第五原理はその全体系を、からだは道場、心は修業者という日々の最小単位に落とし込み、第六原理は世界を顕現させる至愛の源へ順じることを「武の最大の法」として返す。論点は、六つの詩句が社会学理論をただ例示している、ということではない。むしろ理論のほうが、詩句がすでに行っていることを

見えるようにする。すなわち、聖なるマクロ秩序から身体化されたマイクロの所作へ下降し、メゾの稽古を通して、再構成された世界へ上昇していく、その機制を見えるようにするのである。

キーワード：コールマン・ポート；マクロ-メゾ-マイクロ；合気道；植芝盛平；道歌；武；修業；発話行為。

#### 序論

コールマンの舟がここで役に立つのは、「構造」か「個人」か、という雑な二択を拒んでくれるからだ。このモデルは、マクロ水準の条件がどうやって状況化された行為者へ翻訳されるのか、その行為者がどうやって行為を形成するのか、そして無数の行為が集積されることで、どうやってマクロ水準の秩序を再生産したり変容させたりするのかを問う (Coleman, 1990; Ylikoski, 2021)。機制論の言い方をすれば、左上のマクロが右上のマクロを魔法のように直接原因するわけではない。そこには、状況、能力、意味、誘因、規律、身体習慣を通る下降があり、そのあとで、相互行為、集積、制度化を通る上昇がある (Hedström & Swedberg, 1998; Hedström & Ylikoski, 2010)。それが舟なんだ。社会が水に浮かんでいる絵ではなく、因果の仕事がどこで本当に行われているのかを問うための文法なのである。

植芝の六つのプライマーは、まさにこの読みを求めている。ただし、一つ修正

\*幼いころから数学と音楽の学びを支えてくれた両親、米国陸軍、1998年以來のMulti-Network #buddhism IRC Channel (buddhism-chat.org)、米国中央情報局、Aikido Shobukan Dojo (ASU)、Mitsugi Saotome Sensei、Washington State University (WSU)、University of Washington (UW)、そして多くの科学分野に、深く感謝する。いまでは、これらはすべて、ニーズ、ウォンツ、ウィッシュをめぐる議論のなかで用いられた顕著性指標であったことがわかっている。ほんとうの感謝は、 $H_{bias}^{(r)}$ 、愛、そして慈悲に支えられた好奇心、知性、智慧に向けられる。

がいる。素朴なマクロ-ミクロの舟だけでは、道歌と道場には薄すぎる。詩句はマクロ理念と個人選択だけでできているわけではない。それは発せられ、反復され、翻訳され、身体化され、儀礼的に粹づけられ、社会的に点検される。その中間層は偶然ではない。そこには制度としての道場、記憶としての系譜、指令としての師の一句、カリキュラムとしての身体、そして形而上学が所作になる蝶番としての対人稽古がある (Austin, 1962; Niehaus, 2024)。だから下のモデルでは、舟の中にメゾの甲板を差し込む。ここで「武」は曖昧なままにされず、「合気」はただの技術へ落とされず、「和合美化」は飾りのやさしさへ崩れない。

六つのプライマーの連なりは、そのまま機制の鎖として読める。第一原理は「武」を「萬有の根元」として打ち立てながら、同時に「皇国の道」や「百事神と」という歴史的に荷重された語彙を通過する (Ueshiba, 1977, 2025a)。第二原理は「人との合気」から始まり、他者との関係から「大和魂の武魂」の身体化、そして「真善美」の心身における練磨統一へ進む (Ueshiba, 2025b)。第三原理は内側の機制を締める。寸隙なし、心魂一如、誠の人の形成、さらに顕幽両界への練り合わせである (Ueshiba, 2025c)。第四原理は目的を名指す。「和合美化」、すなわち和して美へ向かうことが目標になる (Ueshiba, 2025d)。第五原理はその全体系を極小化する。からだは修業の道場であり、心は修業者であることを忘れてはならない (Ueshiba, 2025e)。第六原理は最後に最高法を示す。世界を顕現させる至愛の源に順じて修業することだ (Ueshiba, 2025f)。舟は下降する。身体がそれを受け取る。稽古がそれをふたたび上へ返す。

## 分析

### マクロ A：技術以前の秩序としての武

第一原理は舟の左上に置かれる。ここは投げ、構え、カリキュラム、個人から始まらない。始まりは、「武は萬有の根元」と

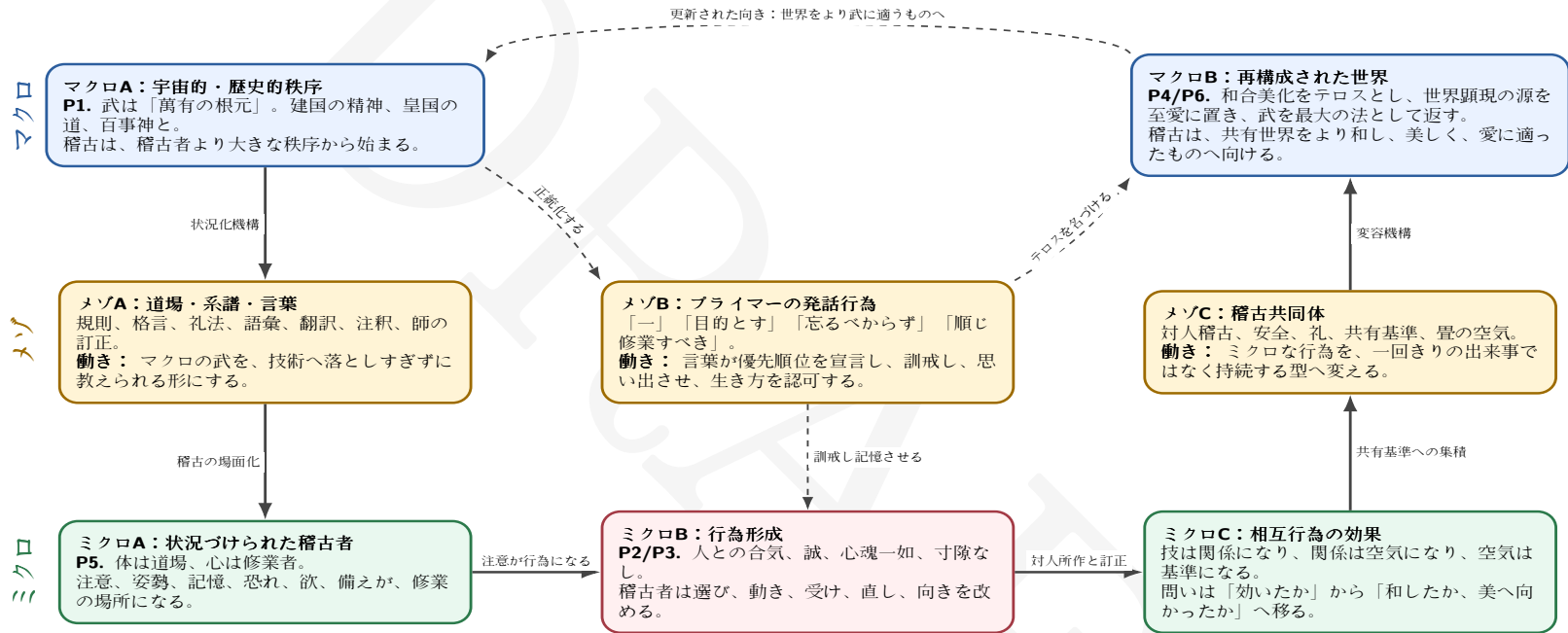
いう主張であり、それが「我建国の一大精神」「皇国の道」「百事神と」という語彙へ編み込まれていくところにある (Ueshiba, 1977, 2025a)。ここで読みは慎重でなければならない。「皇国の道」は、歴史的には初期昭和の道徳形成を支えた帝国・国家語彙に属している。現代の「きれいな精神的合気道」への欲望だけで、そこを洗い流すことはできない (Benesch, 2014; Japanese Ministry of Education, 1949)。同時に、神道と大本の潮流に形づくられた植芝の宗教語彙は、「武」を軍事化された技術へも閉じ込めない (Breen & Teeuwen, 2010; Hardacre, 2017; Stalker, 2008)。だから第一のマクロは二重なんだ。宇宙的秩序であり、同時に歴史的に限定されたイデオロギー媒体でもある。

この二重性はコールマン的にも重要だ。マクロ条件は、裸の抽象として現れるわけではない。いつも何かを着てくる。第一原理では、宇宙論的な主張が国家創建の語彙をまとい、その国家創建の語彙が「百事神と」という聖化の一句によって、さらに差し替えられる。ここでのマクロ秩序は、単なる「社会」ではない。宇宙論、政体、聖なる義務が撚り合わされたものだ。そこでコールマンの舟は問う。こんなマクロの撚り合わせは、どうやって雰囲気ではなく所作になるのか。答えは「信じればよい」では足りない。メゾ形式を通らなければならない。

### メゾ A/B/C：甲板としての道場・発話・共同体

メゾ層は舟の甲板だ。大きな主張が、教えられ、繰り返され、修正され、社会的に持続する形になる場所である。六つのプライマーでは、このメゾ層に道場の礼法、組稽古、系譜の記憶、師の権威、箴言としての短い形式、そして「武」「合気」「誠」「修業」「和合美化」といった語を標語へ潰さないための解説装置が含まれる。

植芝「六つのプライマー」のための修正版コールマン・ボート  
 マクロ秩序はメゾの稽古を通してミクロの所作へ下降し、ミクロの所作はメゾの相互行為を通して世界再構成へ上昇する。



六つのプライマー機構キー。 P1 マクロの向き：宇宙的根元としての武、歴史的媒介としての秩序。 P2 関係の入口：人との合気が武を心身へ練り及ぼす。 P3 内的統一：寸隙なき心魂一如が誠の人をつくる。 P4 マクロの目的：和美化が判断基準になる。 P5 ミクロの尺度：体は道場、心は修業者。 P6 最大の法：至愛の源に順じて修業する。

図 1: 六つのプライマーのための全ページ・マクロ・メゾ・ミクロ・コールマン・ボート。斜めの下降は、聖なる語彙が単なる技術へ落ちることではない。マクロな向きが、状況づけられた稽古へ変換されることだ。上昇も自動的な集積ではない。道場の基準、反復される発話行為、関係のなかの訂正によって媒介される。

このメゾ層が大事なのは、これがなければマクロの主張が大きすぎるからだ。「武は萬有の根元」は人を鼓舞できる。しかしそれだけでは、間合い、拍子、触れ方、他人の身体を受ける倫理を教えられない。逆に、マクロの主張がなければ、ミクロの技はただ効率的なものになりうる。勝つ、制する、見せつける、生き残るための方法になってしまう。道場という甲板が、その二つを結ぶ。大きな言葉を下へ運び、小さな行為を上へ運ぶんだ。

発話行為論は、この点をさらにくっきりさせる。プライマーには、「一」「目的とす」「忘るべからず」「修業すべき」という、言うことで何かをしてしまう形式が反復される (Austin, 1962)。それらは受け身の説明ではない。優先順位を宣言し、注意を命じ、後の所作を測る基準をセットする。第四原理の「和合美化するを以て目的とす」は、和や美がよいという説明だけではない。目的を設定する発話行為である。第五原理の「忘るべからず」は、記憶に関する情報ではない。靈的怠慢への禁止だ (Ueshiba, 2025d, 2025e)。だからメゾ層は、制度的であると同時に言語的でもある。

### ミクロ A：最小の道場としての身体

第五原理は、修正版ボートの左下に置かれる。それは「マクロは実際にはどこへ着地するのか」という問いへの答えだ。最初に建物ではない。最初に道着でもない。最初に形式的な技でさえない。着地先は「体は修業の道場」であり、「心は修業者たるを忘るべからず」である (Ueshiba, 2025e)。これは、マクロ秩序全体がなおそこに現れうる、最小の尺度なのだ。

だからこの一句は強い。制度を身体へ移設してしまうからだ。身体が道場であるなら、行為の状況は稽古時間に限られない。心が修業者であるなら、行為者は型を実行する身体だけではない。ミクロ単位は、姿勢、注意、意図、記憶、情動、準備性からなる、身体的・道徳的・認知的・靈的な配置である。コールマンの語彙でいえば、

これは状況づけの機制だ。マクロとメゾの秩序が、行為者が何に気づき、何を価値づけ、何を恐れ、何を抑え、何を試みるかを形づくる (Coleman, 1990; Ylikoski, 2021)。解説の語り口で言えば、畳が皮膚の内側へ折り込まれた、ということだよ。

### ミクロ B：合気と誠としての行為形成

第二原理は、ミクロ行為に關係的入口を与える。「人との合気より」である。孤立した自己完成から始めない。他者から始める。人との合気を通じて、武魂が心身に練り及ぼされ、「誠」の魂が「真善美」へ練磨統一される (Ueshiba, 2025b)。植芝とその弟子たちの「合気」をめぐる言説を扱った研究も、これを単なる平和の浮遊理念ではなく、拍子、関係、統一に関する具体的技術の言説として読み、そのうえで稽古を通じて靈化されていくものとして支えてくれる (Kudo & Shishida, 2010)。

第三原理は、同じ行為形成の機制を内側から締める。「寸隙なき心魂一如の統一」とは、スキを作るな、ということだ。心と魂を、別々の官僚機構のように動かしてはいけない。内的亀裂が減らされたところで「誠の人」が作られ、その統一はさらに「顕幽両界」、すなわち見える領域と見えない領域へ練り合わされる (Ueshiba, 2025c)。コールマンの言葉なら、ここはまだミクロである。しかし薄い個人主義ではない。行為者は抽象的な選択者ではない。行為者は、メゾ稽古の中で、そしてそれを通じて形成される、身体・心・魂の關係なのである。

ここで舟の底は地下室ではない。機関室だ。マクロ秩序は、知覚、意図、動きのミクロ形成を通らなければ行為にならない。稽古者は「武」をただ適用するのではない。稽古者そのものが、「武」が失敗する場所、歪む場所、あるいは形を取る場所になる。

## マイクロ C からマクロ B へ：相互行為から和合美化へ

第四原理は、上昇の基準を名指す。「和合美化」である。目的は、和し、美化することだ (Ueshiba, 2025d)。コールマンの舟でいえば、ここから変換の機制が始まる。多くのマイクロ行為がメゾの型になり、そのメゾの型がマクロの結果にならなければならない。一つの美しい所作だけでは、まだ世界は変わっていない。しかし、共有されたテロスの下で修正されながら繰り返される行為は、稽古共同体を作る。稽古共同体が十分に持続すれば、局所的秩序を作る。局所的秩序は、より広い秩序の像になりうる。

ただし警告もある。「美化」は粉飾へ落ちうる。道場をよく見せること、先生をよく見せること、葛藤を丁寧な表面の下へ隠すことが「美化」になってしまうなら、その舟には穴が空いている。基準はもっと深いところに置く必要がある。その関係は、第二原理の「真善美」が準備した意味で、より真実で、より善く、より美しくなったのか。相手との出会いは、力を否認することで暴力を減らしたのではなく、力を組み替えることで暴力を減らしたのか。共有空間は、より安全で、より明晰で、より強く、より生きたものになったのか。上向きの矢印は、ここで試されるべきだ。

第六原理が、マクロへの帰還を完成させる。「武の最大の法」は、「主の大御神」に同化し、世界を顕現させる至愛の御霊出の元に順じて修業することだ (Ueshiba, 2025f)。社会学的には、これはマクロの文である。実践的には、マイクロ修正の基準である。技、所作、言葉、序列、沈黙が至愛にかなわないとき、そこから稽古をやり直さなければならない。したがって舟の上部はループする。再構成されたマクロ秩序は、次の下降のための新しい方向づけになる。

## 考察

### なぜメゾ層を明示しなければならないのか

プライマーを単純なマクロ-マイクロモデルとして描くと、いちばん大事な機械装置を見落とす。植芝の道歌は、制度の外に座っている孤立した個人へ向けて語られているのではない。それはすでに、道場、序列、反復、礼法、身体化された教授法、共有された言葉の世界の中にある稽古者へ向けられている。メゾ層は、言葉に取っ手をつけるところだ。「武」は礼になり、間合いになり、手首に置かれた手になり、謝罪になり、修正になり、相手を辱めない拒否になり、投げられたあとに立ち上がる仕方になる。

批判もまた、ここに属している。第一原理の帝国語彙は小さな脚注ではない。それは「武」がかつて、国民形成的な武道主体性として制度化されたメゾ歴史的媒体である (Benesch, 2014; Gainty, 2013)。批判的なコールマン読みは、この媒体を消さない。マクロ語彙がどうやってメゾ制度を通り、マイクロ身体へ入ったのかを問う。そして、後の稽古共同体がその機制を、国家主義的聖化ではなく「和合美化」と「至愛」の方向へどう迂回・再配線できるのかを問う。言い換えれば、古い舟が出航しなかったふりをするな、ということだ。竜骨を作り直せ。

### 機制の連なりとしての六つのプライマー

順番に読むと、六つのプライマーは精密な機制の鎖をなす。第一原理はマクロの存在論と歴史的レジスターを与える。第二原理は対人的入口と価値統合を与える。第三原理は内的統一と顕幽両界への拡張を与える。第四原理はテロスを与える。第五原理はマイクロの場所を与える。第六原理は究極の判断基準を与える。この連なりは、単に話題別ではない。作動順序なのだ。

武は秩序として下降する。合気は関係としてそれを受け取る。誠は寸隙なき人となってそれを封じる。和合美化はその目的を定める。身体道場はそれを日々連続させる。至愛は、その全運動を裁き、更新する。

だからコールマンの舟は、六つのプライマーには梯子よりよく合う。梯子は、下の段から離れて上へ登っていく感じを与える。舟は戻ってくる。すべてのマクロ主張は、小事へ戻らなければならない。すべての小事は、より和した世界へ上り返せるものでなければならない。

### 還元ではなく、翻訳

このモデルを、植芝の宗教語彙を社会学へ還元するものとして読むとはいけない。還元なら、「至愛」は実は社会的凝集性であり、「神」は実は制度的権威であり、「誠」は実は規律化された自己調整である、と言って終わってしまう。それは薄すぎる。よりよい語は「翻訳」だ。コールマンの舟は、尺度の問いを翻訳する。聖なる宇宙的主張がどうやって行為として利用可能になるのか、そして行為がどうやってふたたび世界として利用可能になるのかを問うのである。

同時に、このモデルは「武」を運ぶと主張するすべてのメゾ形式を聖化してはいけない。道場はマクロを美しく媒介することもあれば、歪めることもある。系譜は稽古を保存することもあれば、虐待を保存することもある。反復は磨くこともあれば、鈍らせることもある。発話行為は目を覚まさせることもあれば、強制することもある。だから第六原理が決定的になる。メゾ制度を最高法にしてはいけない。最高法は、至愛の源にかなうことだ。道場はそれによって裁かれるのであって、その逆ではない。

### コーダ

六つのプライマーの中に置かれたコー

ルマンの舟は、教科書の図というより、横から見た道場に近くなる。上甲板には、宇宙秩序としての「武」がある。中甲板には、稽古世界がある。発話、儀礼、修正、系譜、共有基準だ。下部の船体には、稽古が実際に水へ触れる身体と心がある。船体が腐っていれば、上の主張は効かない。甲板がなければ、稽古者はマクロの海を運べない。目的地が誤っていれば、よく作られた舟でさえ迷う。

だから六つのプライマーは、マクロ-メゾ-ミクロ問題へ厳しい答えを与える。宇宙原理を空に置いたままにするな。稽古を身体の中へ閉じ込めるな。制度に、自分こそ源だと勘違いさせるな。武を下降させ、身体に思い出させ、関係に修正させ、共同体に和と美によって自分を試させ、その航路全体を至愛によって舵取りさせよ。これが道場の舟だ。小さな所作が世界を運び、世界が小さな所作を通して応答してくるのである。



### 参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Oxford University Press.
- Benesch, O. (2014). *Inventing the way of the samurai: Nationalism, internationalism, and bushidō in modern Japan*. Oxford University Press.
- Breen, J., & Teeuwen, M. (2010). *A new history of Shinto*. Wiley-Blackwell.
- Coleman, J. S. (1990). *Foundations of social theory*. Harvard University Press.
- Gainty, D. (2013). *Martial arts and the body politic in Meiji Japan*. Routledge.
- Hardacre, H. (2017). *Shinto: A history*. Oxford University Press.
- Hedström, P., & Swedberg, R. (1998). *Social mechanisms: An introductory es-*

- say. In P. Hedström & R. Swedberg (Eds.), *Social mechanisms: An analytical approach to social theory* (pp. 1–31). Cambridge University Press. doi.org/10.1017/CBO9780511663901.001
- Hedström, P., & Ylikoski, P. (2010). Causal mechanisms in the social sciences. *Annual Review of Sociology*, 36, 49–67. doi.org/10.1146/annurev.soc.012809.102632
- Japanese Ministry of Education. (1949). *Kokutai no hongei: Cardinal principles of the national entity of Japan* (J. O. Gauntlett, Trans.; R. K. Hall, Ed.). Harvard University Press. (Original work published 1937). <https://jhti.studentorg.berkeley.edu/texts11.htm>
- Kudo, R., & Shishida, F. (2010). The meaning of aiki in Aikido: Focusing on comments made by Morihei Ueshiba and his pupils. *Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences*, 55(2), 453–469. [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/55/2/55\\_09024/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/55/2/55_09024/_pdf)
- Niehaus, A. (2024). The Aikido of Ueshiba Morihei as ritual practice to reconstruct the world. In Z. Smith, D. Frost, & S. Covell (Eds.), *Religion and sport in Japan* (pp. 131–154). University of Hawai'i Press.
- Stalker, N. K. (2008). *Prophet motive: Deguchi Onisaburō, Ōmoto, and the rise of new religions in imperial Japan*. University of Hawai'i Press.
- Ueshiba, M. (1977). 合気道奥義（道歌）(S. Abe, Ed.). 阿部, 醒石. <http://www.asahi-net.or.jp/~yp7h-td/douka.htm>
- Ueshiba, M. (2025a). 植芝盛平道歌-001: Primer-1, 武 = cosmic principle (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/rj49> (Original work compiled 1977)
- Ueshiba, M. (2025b). 植芝盛平道歌-002: Primer-2, harmony with others (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/f6qq> (Original work compiled 1977)
- Ueshiba, M. (2025c). 植芝盛平道歌-003: Primer-3, heart-mind-spirit inseparable (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/sgc9> (Original work compiled 1977)
- Ueshiba, M. (2025d). 植芝盛平道歌-004: Primer-4, harmonious beautification (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/cd68> (Original work compiled 1977)
- Ueshiba, M. (2025e). 植芝盛平道歌-005: Primer-5, body dojo, heart-mind practitioner (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/b3fd> (Original work compiled 1977)
- Ueshiba, M. (2025f). 植芝盛平道歌-006: Primer-6, deepest love's source followed (L. G. N. R. Space-Coyote, Trans.; OpenAI ChatGPT-5 Pro, Ed.). Shugyokai.org. <https://shugyokai.org/my6z> (Original work compiled 1977)
- Ylikoski, P. K. (2021). Understanding the Coleman boat. In G. Manzo (Ed.), *Research handbook on analytical sociology* (pp. 49–63). Edward Elgar. doi.org/10.4337/9781789906851.00008